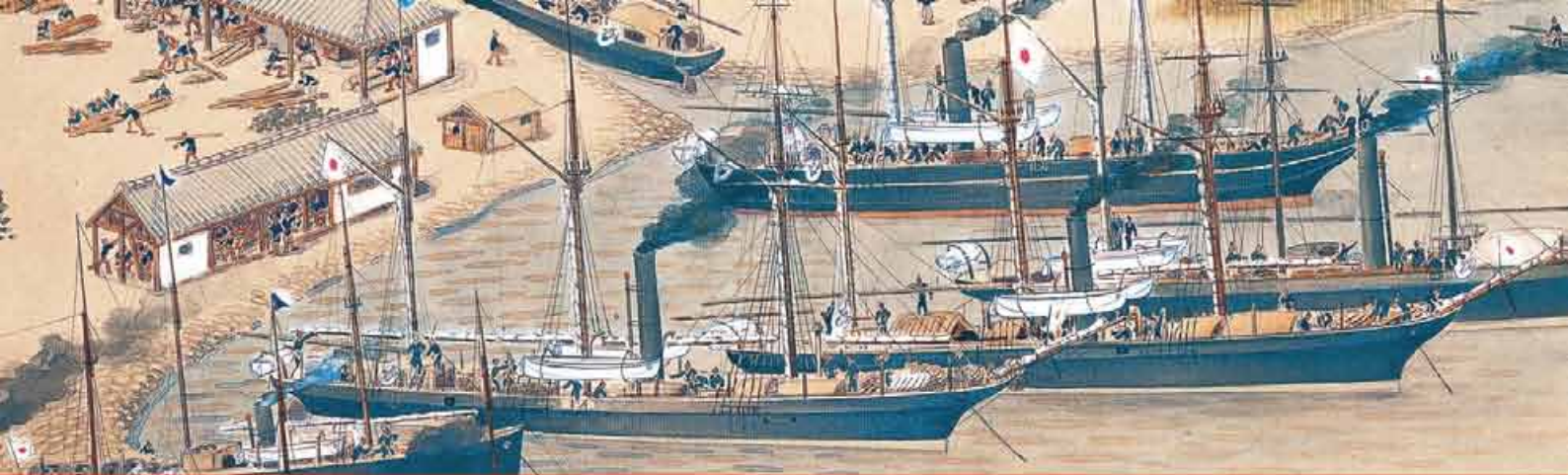




三重津海軍所跡

世界文化遺産登録記念

徴古館第72回企画展

江戸後期の長崎警備

蒸気軍艦を
入手せよ!!

いあいやく

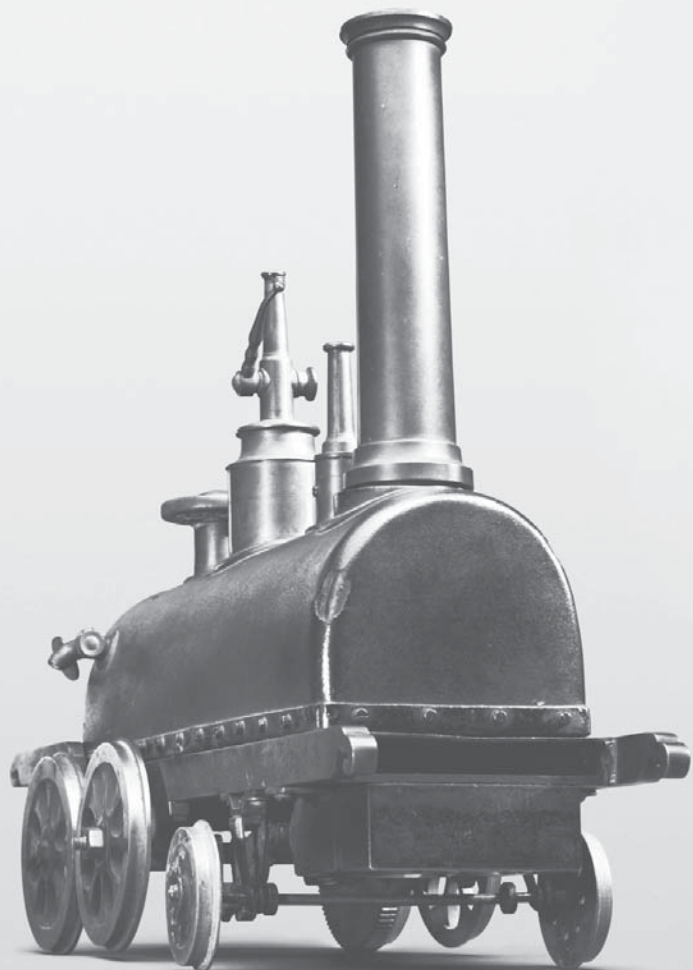
鎖国政策のもと西洋の船が唯一来航した長崎の港。江戸幕府の指示のもと佐賀藩の最重要任務として二〇〇年以上続けられた長崎警備。藩政改革で知られる十代藩主鍋島直正公は二〇〇年の伝統の何を変えたのか。戦術刷新や大型大砲の製造、台場の築造に続いて、直正公は藩士に命じます。——「蒸気軍艦を手せよ!!」

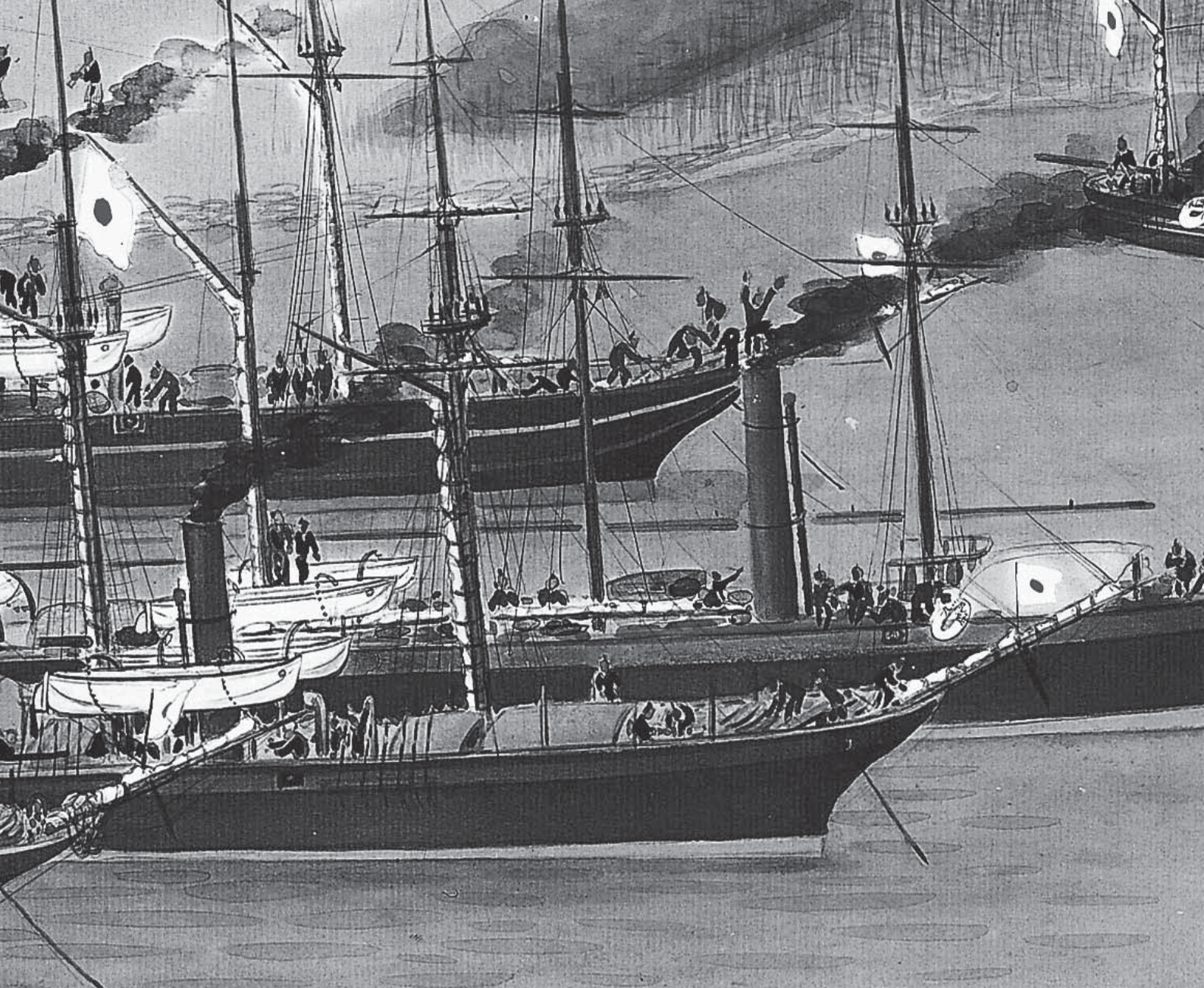
近年、「明治日本の産業革命遺産」の構成資産のひとつとして、三重津海軍所跡の世界文化遺産登録への取り組みが進められてきました。長崎警備のための佐賀藩艦隊根拠地である三重津は、幕末佐賀藩を象徴する場所のひとつです。

本展では、藩士に蒸気軍艦入手を命じた直正公直筆の指示書や、蒸気軍艦運用の喜びが溢れる娘への手紙などが初公開となるほか、佐賀藩精煉方で製作された蒸気機関雛形の一堂公開が、徴古館では平成十年の再開後、初めて実現しました。これらの鍋島家伝来資料を通じて、蒸気軍艦入手の背景にあった直正公のダイナミックな思想と、その実現に向けて取り組んだ佐賀藩のチャレンジに触れて頂ければ幸いです。

平成二十七年七月六日

公益財団法人 鍋島報效会





目次

ごあいさつ

目次・凡例

長崎警備マップ

図版・解説

◆ 長崎警備の伝統

◆ 直正公の登場と両島台場

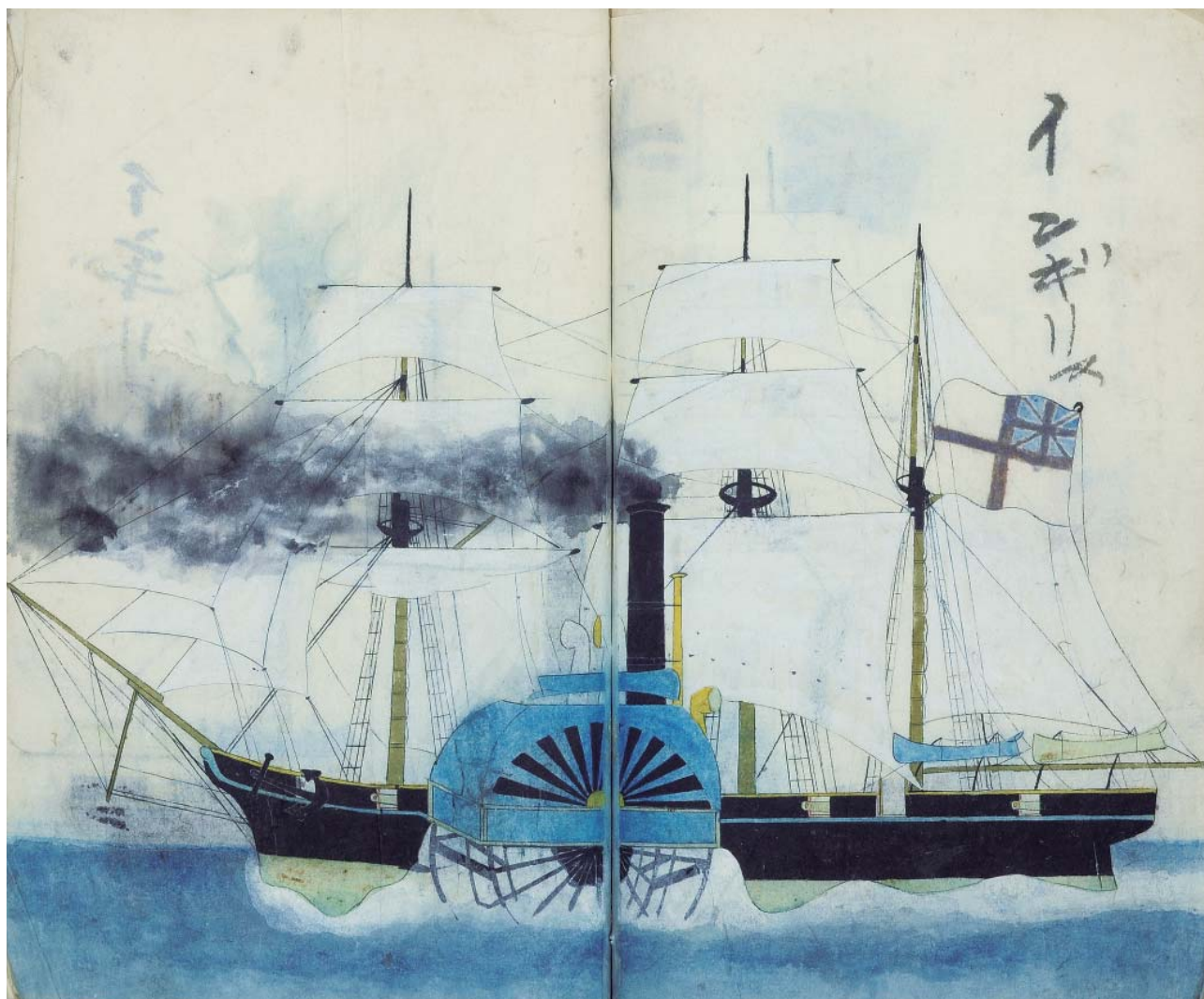
◆ 蒸気軍艦を手任せよ!!

◆ 神の如くは言い継ぐらしも

関係略年表

出品リスト

51 50 45 28 14 6 6 4 2 1



1 外国船の来航を告げる白帆注進

白帆注進外国船出入注進 一冊(三冊のうち第一冊)

江戸時代後期(天保十五年〜安政二年)

縦二四・四cm 横一六・五cm

紙本墨書着色 冊子装

鍋二五二一五六

香焼島・沖ノ島・伊王島など長崎湾に浮かぶ佐賀藩領の島々には、長崎に来航する外国船をいち早く発見するための遠見番所が江戸時代前期から設置されていた(鍋一三・六三勝茂公譜考補)。水平線の彼方に外国船の姿を発見した場合、その速報は直ちに長崎奉行所や佐賀城にもたらされた。これを「白帆注進」という。注進を受け、長崎に近い佐賀藩領の深堀や諫早、佐賀から軍勢が迅速に駆け付ける仕組みとなっていた。

フェートン号事件後の一連の改革の中で文化九年(一八一二)、佐賀城下三カ寺(宗龍寺・龍泰寺・願正寺)を皮切りに周辺の寺社で注進を告げる鐘を撞き継ぐシステムが試行されている(鍋三二六・一三六「触状写」)。これを受けて直正は、天保九年(一八三八)注進の速度とルートの確実性を担保するため次のような改善を命じた(直正公御年譜地取)閏四月二十一日条。

一、注進のルートは一筋では不十分なため、今後は外国船が来航した際は海・陸の二つのルートで伝達すること

一、佐賀城下諸寺社(九カ所)で早鐘等で注進を知らせる合図の仕方について

一、佐賀城下郊外にある敵繰東射場と築地西射場での大砲発射音で注進を周知させること

このように長崎湾の異変は直ちに佐賀城下へと伝わり、緊急事態を告げる寺社の鐘や射場の大砲が喧しく鳴り響いた。長崎と佐賀が一体となる仕組みが整備されていた。

図版は嘉永七年(一八五四)閏七月十五日に注進されたイギリス船四艘のうちの一艘。本書には「卯上刻、白帆四艘注進これ有り、仕切船俄に張切、所々合図放ち」という速やかな対応と、同日長崎に到着していた直正の両御番所巡見、検使や佐賀藩役々らの沖への出張の段取りなどが記されている。安政五年(一八五八)和親条約締結を受け、早鐘合図のシステムは中止された。



第7図 ■ 薬品室



第3図 ■ 船内での歓待

7 鍋島直正公の軍艦視察

鍋島直正和蘭船乗込図 一巻
弘化元年（一八四四） 古川松根筆
縦三〇・〇cm 横一三八九・五cm
紙本着色 卷子装
公益財団法人鍋島報効会 所蔵

わが国での洋式大砲製造は、天保六年（一八三五）に高島秋帆が初めて鑄造し、翌年には佐賀藩武雄領でも鑄造された（川副義敦著『平山醇左衛門』）。同八年に鍋島直正は「清やオランダ船が長崎に持ち渡る品々には、御触れが出されていない有用の武器類があることを耳にし、長崎警備のため「異邦の火術」の心得が不可欠であるとして注文を希望した」（「直正公譜」天保八年九月二十一日条）。鍋島十左衛門茂義（武雄）らによる西洋砲術を直正が初めて目にしたのが天保十一年（「直正公譜」九月六日条）。この年、清国でおきたアヘン戦争の情報が佐賀藩に入ってくる。その後、太田尾・陰ノ尾の各御台場や、湾内の島々への詰人数が増員され、年明けには香焼島に五十人を選び二ヶ年詰めさせる香焼団結が始まる。十三年には「大野原において異船打ち挫き、乗っ取り等の操練」が行われ、十五御茶屋に蘭伝石火矢製造所を設置。十四年には同所に御火術方を設置、十五年には蘭船持渡りのモルチール砲が伊王島に配備され、十五御茶屋において、また御用鑄物師谷口家により洋式大砲が鑄造される（「直正公譜」）。こうして天保年間の後半には洋式大砲の輸入・製造、訓練強化などの取り組みが活発化する。

アヘン戦争を受け、開国を勧告するオランダ国王の国書を携えた使節が軍艦パレンバン号で長崎に入港したのはその直後、天保十五年七月だった。洋式大砲の輸入・製造に取り組み始めたばかりの直正は、警備心得のためとして長崎奉行所に願ひ出て九月十九



蒸気船雛形(スクリー船)



蒸気船雛形(外輪船)



蒸気車雛形

精煉方製 蒸気機関雛形

20 蒸気車雛形 一点

長三九・八cm 高三一・五cm 幅一四・〇cm

21 蒸気船雛形(外輪船) 一点

長八八・〇cm 幅一八・六cm 高五二・五cm

22 蒸気船雛形(スクリー船) 一点

長九九・〇cm 幅三二・〇cm 高六七・〇cm

佐賀藩精煉方製

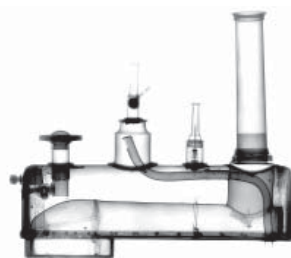
安政二年(一八五五)頃

佐賀県重要文化財

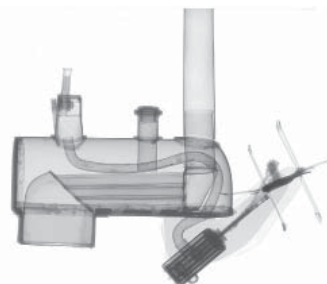
公益財団法人鍋島報效会 所蔵

嘉永七年(安政元年)頃に本格的に動き始めた蒸気船製造の方向性は、翌安政二年(一八五五)から精煉方での蒸気機関雛形の製造へと向かう。「松乃落葉」八月朔日条には「精煉方一手中村奇輔其外より、蒸気船・蒸気車等の雛形製造願ひ出の通り仰せ付けられ候段御差図申し来たり候」との願ひ出に対し、「その段、人々へ相達し、即今より製作取り掛り相成り候事」と達され、すぐに着手している様子が窺われる。この三点は、このとき製作に取り掛った「蒸気船・蒸気車等の雛形」に相当すると考えられるもの。まず最初に製作されたと考えられる蒸気車雛形には、単純な内部構造のため十分でなかった蒸気圧を補うギヤ等の工夫がみられる。つづいて製作されたと考えられる蒸気船雛形(外輪船)は、蒸気車雛形と比較するとボイラーが単管式から多管式となり、さらにスクリー船になるとオッシレイト・エンジンを搭載するなど、蒸気機関研究の発展過程を知ることができる。こうした製造の経験が、やがて蒸気罐の修理や、国産初の実用蒸気船凌風丸の建造へ繋がっていく。雛形三点が揃って展示されるのは十年ぶり。徴古館では平成十年の再開以来初めてである。

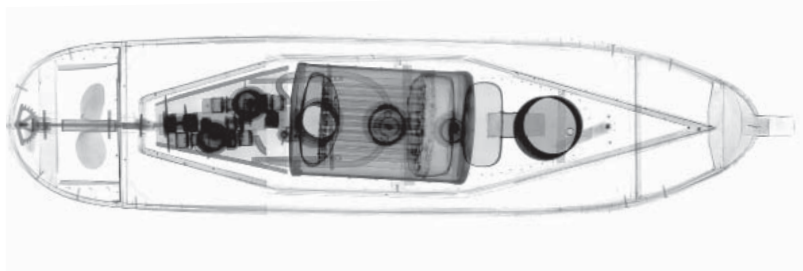
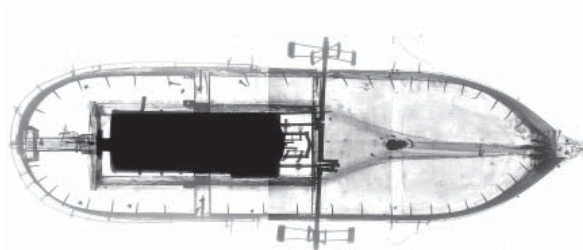
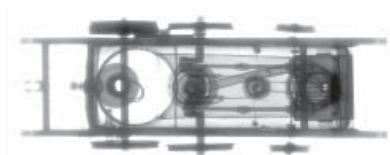
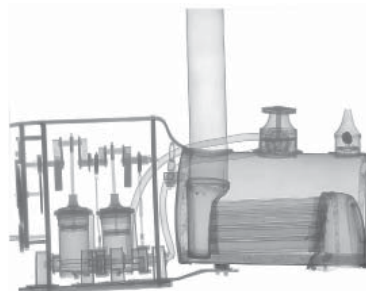
蒸気車雛形



蒸気船雛形(外輪船)



蒸気船雛形(スクリー船)



X線写真:東京文化財研究所 撮影



28 佐賀藩 念願の蒸気船入手

白帆注進外国船出入注進 一冊(三冊のうち第二冊)

江戸時代後期(安政五年)文久元年

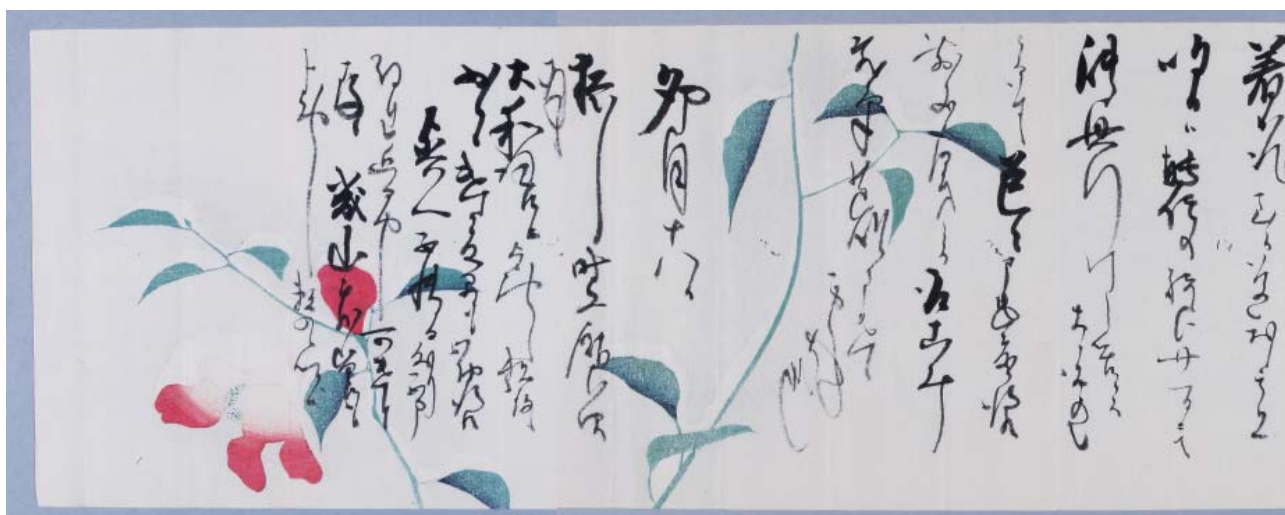
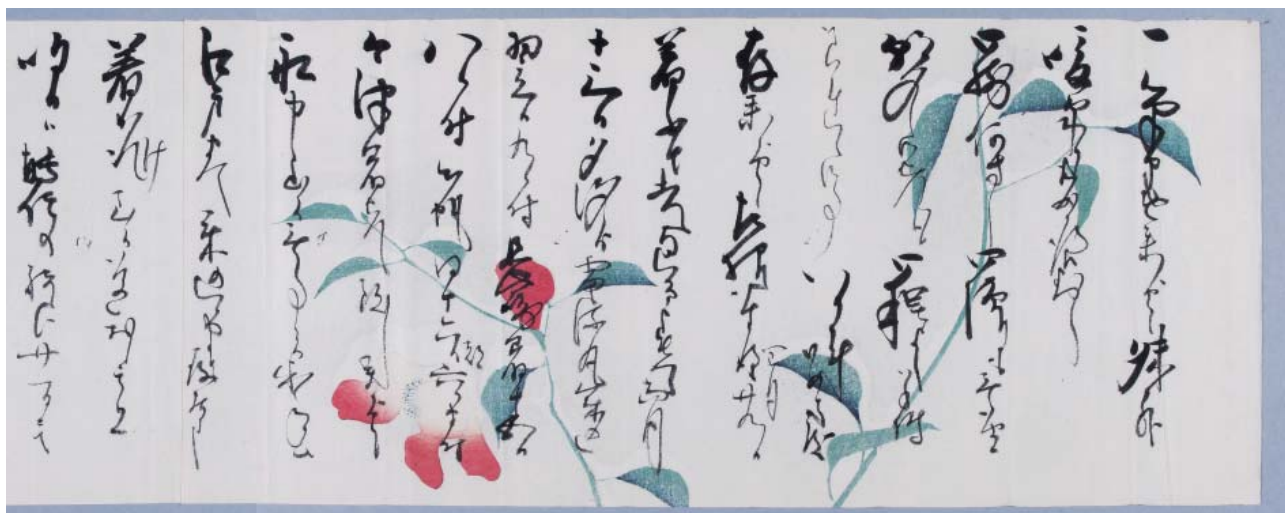
縦二四・四cm 横一六・五cm

紙本墨書着色 冊子装

鍋二五二・五六

長崎港での船舶の出入りや警備について記録した「白帆注進外国船出入注進」(佐賀県近世史料『第五編第一巻 佐賀県立図書館』平成二十七年)。安政五年(一八五八)十月九日条には「蘭艦車蒸気船、内目乗り入れ、この後御注文船艦に長崎と言う印これ有り、美女式人乗与」とある。佐賀藩がオランダに注文していた蒸気軍艦「長崎」の入港である。十月七日より長崎巡見に出ていた直正は早速十一日に乗船し船内を一覧した。長崎から佐賀城に帰城したその日、直正は筆を取り長女貞姫への書簡を認め、「このたび爺訃の蒸気船、それはそれは飛び立つように嬉しく存じ参らせ候」と待望の軍艦到着の喜びを素直に表した。また乗船の感想として「殊の外きれいな船にて別て楽しみに存じ」と高揚する気分を隠さない。美女(オランダ人艦長夫人)とのやりとりも詳しく書き綴っている(『生誕二〇〇年記念展 鍋島直正公』公益財団法人鍋島報効会、平成二十六年)。受取り手続きは十一月六日に完了し、のちに「電流丸」と名付けられた。念願の佐賀藩初の蒸気軍艦である。

長崎警備を目的とした蒸気軍艦だったが、翌年四月には長女貞姫に宛てた直筆の書簡では、「蒸気船に乗り候筈にて、是は子供皆々同道の筈にて皆々大怡びにて候」と家族サービスする予定を知らせている。同年九月には江戸への参勤の途中、大里渡海に電流丸を使用。これに続き佐賀への下国に際しても電流丸を用いたが、この件に関し直正は江戸で井伊直弼と面会した際、やや勿体ぶったかのように「明春の帰国の節には楽しみがあるのです」と語りかけた。「右はいかような御事候や」と尋ねる直弼に対し、「蒸気船にて兵庫から乗船し帰国するのです」と直正。直弼は「それはそれは至極御余儀無し」、「返す返すも御余儀無き御事と再往御称誉」し、蒸気船での帰国を壮挙と認めているようである(『直正公譜』安政六年十二月二十五日条)。



29 蒸気船運用の喜び

貢姫宛て鍋島直正書簡 一通

鍋島直正筆

万延元年(二八六〇)四月十八日

縦一七・三 cm 横八四・八 cm

彩箋墨書

公益財団法人鍋島報効会 所蔵(一〇八七)

万延元年(二八六〇)に蒸気船電流丸で江戸から下国した直正は、翌月の長崎巡見に電流丸と幕府預りの観光丸を利用した。その様子を、嫁ぎ先の川越藩主松平家の江戸溜池上屋敷にいた長女貢姫に宛てた直筆の書簡でこう記す。

十三日夕より電流丸乗り込み、翌日九ツ時(正午頃)長崎着、十五日八ツ時(午後二時頃、長崎を)出帆、同十六日朝六ツ半時(午前七時頃、佐賀の)今津に着船致し参らせ候、…来年は江戸まで乗り込み候はんと存じ居り申し候

長崎まで一日も要しない速度を誇るかのよう、出発と到着の時刻を克明に書き綴り、来年は蒸気船で江戸まで乗り込むとの意気込みを伝える。その行間からは、蒸気船運用に対する喜びと、保有に対する自信さえ読み取ることができる。

これに続けて「明日は転任の祝ひ、廿一日には能興行」で忙しいと綴る。昨年直正は「家督以来多年精勤、長崎表御警衛筋深く心配、手広の御台場一手に引き受け、国力を尽くし成功致し候段、全く御為筋を一途に存じ込め、取り計い常々心懸け神妙の趣」を認められ、中将に昇進していた(「直正公譜」安政六年十二月十六日条)。

〔釈文〕

一筆申遣参らせ候 殊外
暖氣三相成候得共まつく
御摘何方之御障りも無御座、
朝夕之御せんも御程よく御手附
られ候御事、いか計御めて度
存参らせ候、左様御座候得は、閏月廿九日
着義は先達而申遣候 當月
十三日夕より電流丸乗込、
翌日九ツ時長崎着、十五日
八ツ時出帆、同十六日朝六ツ半時
今津着せん致し参らせ候
船中至而無事二而、来年は
江戸まで乗込候半と存居申候
着かけ至而取込おし、其上
明日ハ轉任の祝ひ、廿一日ニハ
能興行いたし候客ニ而大取込
ニ而御座候、色々申遣度候得共、
前文次第二而取こみ、
乱筆荒く申遣候

万年

めてたく、かしく

(万延元年)

如月十八日

猶く時かふ厭ひ候様
存候

大和さまへもよろしく頼存候
少々遣し度品も御座候得共、
與一不快二而分り不申、
何れ近日中可遣と
存候、幾山其外皆々へも
よろしく頼入候、以上

謝辞

本展の開催にあたりご協力・ご助言頂きました
左記の関係機関、関係各位に厚く御礼申し上げます。
(敬称略・50音順)

佐賀県立佐賀城本丸歴史館

佐賀県立図書館

石橋道秀

川副義敦

永松 亨

百武 由樹

古川 英文

前田 達男

蒸気軍艦を手入れせよ!!

江戸後期の長崎警備

編集・発行 公益財団法人鍋島報効会

〒八四〇・〇八三一

佐賀市松原二丁目五・一二二

TEL. 〇九五二・一二三・四二〇〇

URL <http://www.nabeshima.or.jp>

発行年月日 平成二十七年七月六日

印刷 ㈱佐賀印刷社

本書の全部または一部を無断にて転載・複製すること
を禁じます。 © 二〇一五 公益財団法人鍋島報効会



The World Cultural Heritage

Mietsu Navy Duck



徴古館
The Museum CHOKOKAN
NABESHIMA